九州文化財研究所 創設20周年記念

～生誕450周年記念によせて～

『加藤清正の実像と英雄像の受容』

開催日：4月27日（土）
場　所：くまもと県民交流館パレア
主　催：九州文化財研究所
後　援：熊本県・熊本県教育委員会・熊本日日新聞社・
熊本放送・熊本ルネッサンス県民運動本部・
熊本県文化財保護協会・熊本地名研究会

シンポジウム開催にあたって

人間は、先人たちの努力の積み重ねによって歴史をつくってきました。現在、私たちが暮らす熊本も、多くの先人たちによって歴史がつくられてきました。その中でも、今回のシンポジウムで取り上げる､加藤清正は特別な存在であるといえます。このことは､熊本県外の方には耳慣れない「せいしょうこう」という言葉が、実は「清正公」のことで、さらに「さん」の敬称を二重につけ「清正公さん」となることで転訛して「せいしょこさん」と親称化したことからも容易に理解できるように、加藤清正の英雄像は人口に膾炙され、この地に強く根付いています。また、神として崇め立てられ信仰の対象となっています。清正公信仰は、二百年遠忌にあたる文化７年 (1810) に最盛期となり、現在本妙寺の最大の行事となる「頓写会（とんしゃえ)」もこの頃にはじまったと言われています。

しかし、熊本になじみの深い加藤清正の実像は、意外と不明な点が多いのです。現在まで知られている英雄像は、いつの段階でどのような過程で私たちの認識となったか、またその実像はいかなるものか、これを皆さんで語りあいたいと考えたのが今回の趣旨です。

この趣旨にご理解をいただいた　東京大学史料編纂所教授　山本博文先生に今回は基調講演をしていただくことになりました。引き続き加藤清正の実像を県内でご活躍の有識者の方々に語りあっていただきたいと思います。

最後になりましたが、今回ご参加いただいた皆様、ご後援をしていただいた各位に厚くお礼申し上げます。

2013 年 4 月 27 日

九州文化財研究所
代表　徳永和人

主催者プロフィール

九州文化財研究所
代表　徳永 和人

江戸時代中期より代々続く肥後細川藩の庄屋の家系で、
藩の医師である徳永尚玄を高祖父とする。
1930 年　玉名市石貫村に生まれる。旧制玉名中学校卒業
1950 年　官立久留米工業専門学校（旧制、後に九州大学に統合）卒業
1963 年　有明測量開発社　創設
1993 年　九州文化財研究所　創設
社団法人 熊本県測量設計業協会　会長（７期１５年)・社団法人 土地改良測量設計技術協会九州支部理事・社団法人 熊本県建設産業団体連合会理事
財団法人 熊本県建設技術センター運営協議会委員・社団法人 日本国土調査測量協会本部理事・社団法人 全国測量設計業協会連合会本部理事（総務副委員長)・九州地区協議会 会長・玉名商工会議所会頭（２期６年）　など歴任
これらの功績により、2000 年、勲五等旭日双光章を授与される。
この他にも　玉名温泉尚玄山荘　山鹿温泉富士ホテルなどを経営。

講演者紹介

基調講演講師・パネラー

東京大学史料編纂所教授　山本 博文 氏　やまもと・ひろふみ

東京大学史料編纂所教授。専門は江戸時代の政治史および武士研究。岡山県立津山高校を卒業し、東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院修了後、史料編纂所助手となり、現在、教授。大学院学際情報学府兼担。1990年、『幕藩制の成立と日本近世の国制』（校倉書房）により、東京大学より文学博士の学位を授与。1991年、『江戸お留守居役の日記』（読売新聞社）により第40回日本エッセイストクラブ賞受賞。江戸幕府の残した史料の外、日本全国の大名家史料を調査することによって、幕府政治の動きや外交政策における為政者の意図を明らかにしてきた。また、殉死や切腹などを素材に武士身分に属する者たちの心性（メンタリティ）の究明や、幕臣の出世や大奥女中についても研究している。最近の著書に、『切腹』『日本史の一級史料』（ともに光文社新書）、『武士の世間』（中公新書）、『徳川将軍家の結婚』（文春新書）、『お殿様たちの出世』（新潮選書）、『天下人の一級史料』（柏書房）、『江戸に見る日本のかたち』（ＮＨＫ出版）、『日曜日の歴史学』（東京堂出版）、『信長の血統』（文春新書）、『現代語訳・武士道』（ちくま新書）、『こんなに変わった歴史教科書』（新潮文庫）などがある。最新刊は、『続日曜日の歴史学』（東京堂出版）。『100分de名著』（NHK Eテレ）「新渡戸稲造『武士道』を読む」、『さかのぼり日本史』（NHK Eテレ）「鎖国という名の外交」など、テレビ・ラジオにも数多く出演。

パネラー紹介

大阪大学名誉教授　猪飼 隆明 氏　いかい・たかあき

1944 年、福井県生まれ。京都大学工学部合成化学科から文学部史学科に転じ、同大学大学院修士・博士課程を経て、1976 年熊本大学に赴任。1998 年大阪大学文学部に転任し、その後大阪大学名誉教授となる。
現在、熊本県に在住。
著書に『西郷隆盛—西南戦争への道—』（岩波書店 1992 年）、『対外観』（近代日本思想大系一二、共編者、岩波書店、1988 年）、『熊本県の百年』（山川出版、共著、1985 年）、『熊本県の歴史』（山川出版、共著、1995 年）などなど。

熊本地名研究会副会長　佐藤 伸二 氏　さとう・しんじ

1944 年、下益城郡富合町（現熊本市）生まれ。熊本大学法学部史学科卒。元国立八代工業高等専門学校教授（現国立熊本高等専門学校）。熊本地名研究会副会長・やきもの研究会会長・九州文化財研究所顧問。専門は歴史考古学・地名学。
歴史考古学と地名学を融合した観点から地域史を研究。加藤清正の支城である佐敷城をはじめとして、多くの城郭の発掘調査の指導助言を行う。
著書等『豊野村史』、『新熊本市史』、『新宇土市史』、『日本土器事典』（雄山閣）「掘り出された石垣は語る　佐敷城秘話」『熊本歴史叢書４』（熊本日日新聞社）ほか。

熊本大学教授　吉村 豊雄 氏　よしむら・とよお

1948 年、佐賀県唐津市生まれ。広島大学大学院博士課程修了、文学博士。熊本大学文学部教授。主な研究テーマとしては、近世の知行制と給人財政に関する研究、日本近世における「近代行政文書」生成・発展過程に関する研究、藩政文書・地域文書の体系的分析による前近代日本社会到達形態の解明、天草四郎・宮本武蔵の実像解明など。著作に「参勤交代の制度化についての一考察」『文学部論叢 (熊本大学) 29』、『近世大名家の権力と領主経済』、『一の宮町史　藩政下の村と在町』『幕末武家の時代相〈上・下〉—熊本藩郡代中村恕斎日録抄』、共著に『熊本藩の地域社会と行政　近代社会形成の起点』など多数。

コーディネーター

九州文化財研究所研究部長・学芸員　花岡 興史　はなおか・おきふみ

1961 年、熊本市生まれ。九州大学大学院博士課程単位取得。高校教員などを経て、九州文化財研究所研究部長・学芸員。熊本県立大学非常勤講師、国立熊本高等専門学校講師を歴任。公益社団法人日本文化財保護協会理事・加藤清正公と本妙寺の文化遺産を守る会理事。専門は近世政治史・外交史。官僚システム、意思伝達のメカニズムの研究が当面の課題。著書『新史料による天草島原の乱　その時徳川幕府軍はどう考えたのか』、『新甲佐町史』、「江戸幕府の城郭政策にみる「元和一国一城令」」『熊本史学』第 97 号、『戦国時代人名辞典』（学研）ほか。

九州文化財研究所 創設20周年記念
～生誕450周年記念によせて～
「加藤清正の実像と英雄像の受容」

■ 日　時　　2013年4月27日　13時～16時40分
■ 場　所　　くまもと県民交流館パレア　パレアホール
■ 主　催　　九州文化財研究所

■ 後　援　　熊本県
熊本県教育委員会
熊本日日新聞社
熊本放送
熊本ルネッサンス県民運動本部
熊本県文化財保護協会
熊本地名研究会

■ 来　賓　　小野 泰輔 氏　熊本県副知事
村上 寅美 氏　元熊本県議会議長
柳田 誠喜 氏　熊本県教育庁教育総務局局長
木村 利明 氏　熊本県立図書館館長
池上 正示 氏　本妙寺住職
吉丸 良治 氏　永青文庫常務理事
白木原和美 氏　熊本大学名誉教授
松本寿三郎 氏　熊本史学会会長・元熊本大学教授
工藤 敬一 氏　熊本大学名誉教授
冨田 克敏 氏　元京都大学教授
今村 克彦 氏　熊本県文化財保護審議会委員
島津 義昭 氏　元九州考古学会会長
三澤　純 氏　熊本大学准教授
小川 弘和 氏　熊本学園大学准教授
加藤 久雄 氏　長崎ウエスレヤン大学准教授
松下純一郎 氏　熊本日日新聞社編集局長
髙木 恭介 氏　熊本県文化財保護協会事務局長

2013年4月27日(土)

12時30分　受付開始

13時00分　開会

主催者挨拶

九州文化財研究所代表　　徳永 和人

来賓挨拶

熊本県副知事　　小野 泰輔 氏

講演者紹介

元熊本大学教授　　松本 寿三郎 氏

13時20分　基調講演

豊臣秀吉の「唐入り」と加藤清正

東京大学史料編纂所教授　山本 博文 氏

14時30分　パネルディスカッション

加藤清正の実像にせまる

パネラー

大阪大学名誉教授　　猪飼 隆明 氏

熊本地名研究会副会長　　佐藤 伸二 氏

熊本大学教授　　吉村 豊雄 氏

東京大学史料編纂所教授　山本 博文 氏

コーディネーター

九州文化財研究所研究部長・学芸員

花岡 興史

16時30分　閉会挨拶

16時40分　閉会

メモ

基調講演

豊臣秀吉の「唐入り」と加藤清正

東京大学史料編纂所教授
山 本　博 文 氏

豊臣秀吉の「唐入り」と加藤清正

東京大学史料編纂所教授　山本 博文

はじめに

一　豊臣秀吉と「惣無事令」
　1　「惣無事令」は存在しなかったか
　2　「惣無事令」の系譜
　3　「惣無事」の背景としての「唐入り」

二　豊臣秀吉「唐入り」の意図と朝鮮
　1　「唐入り」の前提
　2　「唐入り」の開始と朝鮮国王の処遇

三　豊臣秀吉と天皇
　1　秀吉の渡海を止めた後陽成天皇の宸翰
　2　秀吉と天皇の上下関係と力関係

四　豊臣秀吉の「唐入り」の意図
　1　「からのみやこ」は「北京」か
　2　秀吉の東シナ海〜南シナ海支配構想

五　日本と朝鮮の講和交渉
　1　秀吉はなぜ講和交渉を始めたか
　2　小西行長と加藤清正の対立
　3　加藤清正の譴責と復権

おわりに――豊臣秀頼と加藤清正

資料編

【史料１】1582 年（天正 10）11 月 5 日付け、
イエズス会総長宛日本年報追信（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』Ⅲ－６）
(織田信長は) 毛利 (氏) を征服し終えて日本の全六十六カ国の絶対領主となったならば、シナに渡って武力でこれを奪うため一大艦隊を準備させること、および彼の息子たちに諸国を分け与えることに意を決していた。

【史料２】1586 年（天正 14 ）3 月（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』Ⅲ－７）
自分は朝鮮とシナを征服することを決心し、そのため材木を切らせて彼の軍勢を運ぶ二〇〇〇の船を造るよう命じた。

【史料３】天正 14 年（1586）6 月 16 日宗義調宛て秀吉朱印状（「宗家文書」）
就中於日本地者、東日下迄悉治掌、天下静謐事候条、筑紫乍見物、可被成動座候。其刻高麗国へ被遣御人数成次第、可被仰付候之間、其砌忠節可被申上候。依其動国郡等、某々仁為褒美可被下候之条、可遂薫 (勲) 功儀、尤被思召候。

【史料４】天正 15 年（1587）5 月 29 日付け北政所宛て秀吉自筆書状（『豊太閤真蹟集』）
又こうらいのほうまて、にほんの大いりゑしゆし可申よし、はやふねをしたて、申つかはせ候、しゆし不申候はば、らいねんせいはい可申よし、申つかはせ候、からこくまててにいれ、我等一このうちに申つく可候さけすみをいたし候へは、一たんほねをれ申候、

【史料５】高麗への返書（『新訂続善隣国宝記』）
予大明に入るの日、士卒を将いて軍営に臨まば、則ち弥隣盟を修むべきなり。予が願いは他に無し、只佳名を三国に顕さんのみ。

【史料６】文禄元年（1592）5 月 18 日秀次宛て秀吉書状（尊経閣文庫所蔵）
一、殿下陣用意不可有油断候。来正二月比可為進発事。
一、高麗都は二日落去候。然間弥急度被成御渡海、此度大明国迄も不残被仰付、大唐之関白職可被成御渡候事。
(15 条略)
一、大唐都へ叡慮うつし可申候。可有其御用意候、明後年可為行幸候。然者都廻の国々十ケ国可進上之候。其内にて諸公家衆何も知行可被仰付候、下ノ衆可為十増倍候。其上之衆ハ可依仁躰事。

【史料７】『鹿苑日録』天正 20 年（1592）6 月 13 日条
主聖曰、自太閤御入唐云々、然者予可被召連之由、聖帝直ニ勅言也。欽而抵頭諾矣。於五岳出世衆廿員可有召具云々。於予辱云々。

【史料８】文禄元年（1592）６月 20 日付け「こや」宛て秀吉自筆書状（『豊太閤真跡集』）
かうらいへハ、三月一たんとうミのおもてよく候と申候まゝ、はるまてのへ申、なこやにてとしおとり可申候。こらいへはや大くわんつかわせ候。なこやのふしんをさせ申し候。(中略)かへす〳〵、はや〳〵こらいゑは、うミのおもてなミあらく候まゝ、はるになり候てこし可申候まゝ、心やすく候へく候。

【史料９】秀吉宛て後陽成天皇宸翰（京都国立博物館所蔵）
高麗国への下向、険路波濤をしのかれむ事、無勿体候。諸卒をつかはし候ても可事足哉。且朝家のため、且天下のため、かへす〳〵発足遠慮可然候。勝を千里に決して、此度の事おもひとまり給候ハヽ、別而悦おほしめし候へく候。猶、勅使申へく候。あなかしく

太閤とのへ

【史料 10】「組屋文書」小浜市立図書館
一、につほんのていわうさま（日本の帝王様）を、からのミやこ（唐の都）へすゑさせられへきあいだ、その御よういあるへきよしおほセあけられ、すなハちたいりこりやうしよ（内裏御料所）として、ミやこまハり（都廻り）にて十かこく御しん上なされ、そのうちにてしよくけしゆ（諸公家衆）へもしはいならるへく候。
一、うへさまは、ほんきんのミやこに御さ所をなされ、又それをもたれそ御すへなされ、につほんのふなつきにんぽうふ（寧波府）［　　］きよ所を御きわけなさるへき［　　］(後略)
一、かうらいこくわうハ、御人数宮古はん道ほどふなわたりかわきわまてあいつめ候へハ、たいりに火をかけにけのかれ候。おい〳〵人数さしつかハし候よし、おちうしん候事。
一、こくわう（国王）の事、そうへつせつかい（惣別殺害）つかまつるへからさるむね、おほせつかハされ候処に、かくのことくのしたて御残おほ［５～６文字］うなどににけこもれられ候ハヽ、がしにおよふへく候まゝ、何とつかまつり候て成共、たつねいたすへく候。につほんにおゐてかんにん（堪忍）仰付らるへきよし、おい〳〵おほせいたされ候。けふ申来候ハ、へいわんたう（平安道）と申たいたうちかく（大唐近く）へのかれ候。おつかけ申よし候まゝ、さためてやかてとらへ申へきとそんし候。

【史料 11】「南禅旧記」下（国立公文書館内閣文庫所蔵）
大明日本和平条件
一、和平誓約無相違者、天地従雖尽、不可有改変也、。則迎大明皇帝之賢女、可備日本之后妃事。
一、両国年来依間隙、勘合近年断絶矣。此時改之、官船・商舶可有往来事。
一、大明・日本通好、不可有変更旨、両国朝権之大官、互可題誓詞事。
一、於朝鮮者、遣前駆追伐之失、至今弥為鎖国家安百姓、雖遣良将、此条目伴々於領納者不顧朝鮮之逆意、対大明割分八道、以四道井国城、可還朝鮮国王。且又前年、従朝鮮差三使、投木瓜之好也。余蘊付与四人口実。
一、四道者既返投之、然則朝鮮王子井大臣一両員為質、可有渡海事。
一、去年、朝鮮王子二人、前駆者生擒之、其人非凡間、不混和平、為四人度与沈遊撃可皈旧国事。

一、朝鮮国王之権臣、累世不可有違却之旨、誓詞可書之。此旨趣、四人向大明勅使、纏々可陳説之者也。

文禄二年癸巳六月廿八日御朱印

石田治部少輔
増田右衛門尉
大谷刑部少輔
小西摂津守

【史料 12】『朝鮮王朝実録』宣祖 27 年（文禄 3 ・1594）年 6 月 19 日条
其中清正曰、「吾国王尚在、慈仁愛人。関伯隷人也。只得擅號令於西辺諸島」云。
（現代語訳）その中で清正は、「われらの国王は今も健在で、慈仁愛の人である。関白秀吉はその臣下であり、ただ好きなように西の地域に命令ができるだけだ」と言った。

【史料 13】『朝鮮王朝実録』宣祖 28 年（文禄 4 ・1595）2 月 30 日条
清正則通書于關白曰、「初意則欲以中原爲諸侯。而今則反爲中原之諸侯。極爲憤慨。今明年内、雖未能直擣于中原，留在此國，限十年侵擾，則庶可成事。行長之言，似爲卑弱，當斬梟示」云。關白答内、以清正爲妄言、以行長爲得計、和親封貢之事、専委於行長。
（現代語訳）清正は関白に手紙を送って、「当初は中国を諸侯としようとしたのに、逆に中国の諸侯となるのはきわめて嘆かわしいことです。たしかに今年・来年には中国を攻撃できないとしても、朝鮮に駐留して十年も戦い続ければやがては目的を達するはずです。行長の言葉は卑弱なので、斬って首級をさらすべきです」と言った。関白の回答は、清正の訴えを妄言、行長の意見を得計とし、講和・封貢のことを行長ひとりに委ねた。

メモ

パネルディスカッション

加藤清正の人物像と熊本

東京大学史料編纂所教授

山本　博文氏

加藤清正の新たな理解を求めて

熊本大学教授

吉村　豊雄氏

近代日本における清正公信仰

大阪大学名誉教授

猪飼　隆明氏

清正公信仰と干拓

熊本地名研究会

佐藤　伸二氏

コーディネーター

九州文化財研究所研究部長・学芸員

花岡　興史

加藤清正の人物像と熊本

東京大学史料編纂所教授　山本博文

【史料 1】島津義弘書状（島津忠恒宛）＜慶長 4 年（1599）9 月 21 日＞

加主事ハ連々氣任之仁候之間、無思慮弓箭をも被取出儀も可有之候之欤、

【史料 2】出田権左衛門・阿久祢二郎兵衛覚＜寛永 9 年（1632）11 月 14 日＞

（端裏書・細川忠利自筆）「肥後先代ノしおきノ覚」

覚

一、　先代之蔵納并給人地、村ニより無理之年貢を申かけられ、百姓妻子之儀者不及申、身をうり家をたへし申たる村多々御座候、さやうの村ハ隣郷より入作に仕候故、物成も以外安ク御座候事

一、　海邊之村、れうを仕候村ハ勿論之儀、れうを不仕村にも、ごさいの肴を申付、過分之米を出し申候ニ付、以外百姓中迷惑仕ル由、そせう申候事

一、　上木之事、慶長十二年ノけんち之時、帳面ニのり申役銀、当年迄納来り候、其木数大分かれうせ申ニ付、上木役に迷惑仕ル事

一、　酒札・むろ札・商札・馬札、如此之札銀ニ町人迷惑仕候へ共、当年ハ御勘定衆御吟味を以御ゆるし被成候事

一、　当年之日損ハ惣なミ之儀とハ申なから、宇土郡之内大分之日焼村之分、やう〳〵四分五分之年貢かけ申村、大かた七八千石ほども可有御座候哉、此百姓共来夏ニ取付申飯米并作食無之由、此中達而理り申儀ニ御座候、此者共にハ飯米作食被借下可然候ハんと奉存候、益城郡之内にも、さやうの村三四ヶ村も御座候事

一、　宇土郡も益城郡も百姓ハ殊外かじけ申候、百姓さへちと有付申候者、御所務方ハまし可申由承届候事

一、　前方郡代之下代并代官蔵奉行なとの手代ニ付申たる国中之者、可被召抱之由候、此者共ハ尤りちぎなる者も御座候、又しかたあしき者多々御座候間、能御ぎんミ入可申由、下々取さた仕候事

右之前、我々承届候分、覚之為書付上申候、乍勿論右之内役ニ立不申儀ハ、以御用捨可被仰上候、奉頼候、以上

十一月十四日　　出田権左衛門（花押）

阿久祢二郎兵衛（花押）

町市之充殿

【史料 3】細川忠利書状（細川光尚宛）＜寛永 9 年（1632）12 月 10 日＞
我事、十二月九日ニ熊本へ入城申候、可心安候、事外ひろキ圍にて候、城も、江戸之外ニハ、これほとひろキ見不申候、

【史料 4】細川忠興書状（細川忠利宛）＜寛永 9 年（1632）12 月 17 日＞
一下々のさほう頓而なをり可申候体ニ見申候、親肥
後程上下之法度のなき仁ハ稀なる事ニ候つる、如
此ニ候ゆへ、高麗之かたにても見苦敷事共見申候
事、

【史料 5】細川忠利書状（細川光尚宛）＜寛永 10 年（1633）2 月 5 日＞
ことし來年つゝしミ申候ハゝ、我々ハかねもちニなり可申候間、

【史料 6】細川忠利書状（細川光尚宛）＜寛永 10 年（1633）2 月 18 日＞
肥後へ下候而、新國ニ候間、下々事之外成敗無之候は成間敷候條、不届者ハかたはしよりなて切ニ可仕之由、御年寄衆へも申合候へ共、一人も科人無之候故、至今日、下々迄一人も成敗人無之候、か様之不思議成儀は無之と存事候、

加藤清正の新たな理解を求めて

熊本大学教授　吉村 豊雄

私は、加藤清正、清正時代の領国について専門的に研究したことはなかった。ところが、2006 年、翌年に熊本築城四百年をひかえて、熊本で、「加藤清正―築城と治水」をテーマに、全国地名シンポジウムが開催されることになった。どういうわけか、私が報告者の一人となり、急遽原稿をまとめ、「加藤氏の権力と領国体制―清正期を中心に―」と題して報告した。報告を依頼された時、すぐに思い浮かんだのは、日頃、漠然と考えていた森山恒雄氏の加藤氏研究に対する疑問だった。周知のように、森山氏は、加藤氏研究を豊臣期大名論にまで高められた第一人者である。

清正は、その武将としてのイメージ、熊本城の威容、水利土木事業伝承、そして書状に見る詳細な命令形態から、「ワンマン」的なリーダーシップで領国を手堅く掌握・主導していたという印象が強い。私は、そうした清正の大名イメージに疑問を感じていた。疑問の根拠は、加藤氏の関係史料のあり方、清正の書状の特色にある。

加藤氏に関する第一次史料には、二つの特色がある。（1）大名家としての組織文書、藩政文書が残されていない、（2）清正が出した書状類が同時代の中でも数多く残されている、この二点である。（1）の点は、加藤氏が後に改易に処せられたこととも関係しているだろうが、（1）（2）は、実は密接に関係しているのではないか。

数多い清正の書状類を検討してみると、際だった特色が認められる。すなわち、①清正は熊本を離れると、書状をもって国元に命令・指示を下しているが、時に 50 条に及ぶような命令を下した書状は、側近重臣に宛てられ、家政と直轄地（蔵入地）を命令範囲としている、②家臣団関係・知行制関係、領域支配関係の命令内容が極めて少ない、③対小西領関係内容の欠如、④芦北郡関係内容の欠如、などである。

たとえば、清正の肥後半国時代、清正と小西行長は、緑川をはさんで肥後を二分して領有している。清正と行長の関係は、虚実おりまぜて、よく知られているところであるが、その両者が領国を接し、南半国の小西領をはさんで芦北郡には加藤領が設定されている。恐らく様々の事件・トラブル、領民の動きがあったはずである。しかるに、行長・行長領に関わるような記述を含んだ清正の書状は、一点も見受けられない。それは何故か。簡単に言えば、清正の権力は領国全域に及ぶような大名権力ではなく、家政と直轄地という自分の統治領域を中心にした「ワンマン」権力であり、加藤氏一族・重臣クラスの知行地に直接に及ぶものではなかったことが推測される。

清正の死後、幕府は、幼い忠広が権力継承できるような領国体制をつくり出そうとして、特に最大重臣の加藤美作を強制隠居させる手立てを講じるが、結局、清正をもってしても克服できなかった権力の限界が、御家騒動を生み、加藤氏改易に至ることになる。

全国地名シンポ当日、森山先生も姿を見せておられた。先生のご意見をうかがえなくなったことが、残念である。

近代日本における清正公信仰

大阪大学名誉教授　猪飼 隆明

Ⅰ「治水・土木・開拓の神」として

文化文政期以来、とくに鹿子木量平の『藤公偉業記』（天保３年＝ 1832）によって、民衆は、清正を「治水・土木・開拓の神」として、自らが行なう干拓等の諸行為の成功を祈願し、またその行為の正当化の根拠としたが、近代においても、熊本人の日本国内外への発展にあわせて、その信仰の普及が図られた。

1　北海道札幌市琴似に、1875（明治８）年、屯田兵第１大隊１中隊入植。その隊員の東山源左衛門・源八郎親子が清正公像を祀った。→ 1882 年　日蓮宗日登寺

2　北海道江別市の江別神社―1885 年に北海道から移住した屯田兵たちが建てた神社で、天照大神･大国主命とともに清正公を祀る。（福西大輔『加藤清正公信仰』岩田書店　2012 年）

3　1891（明治 24）年益城郡の尾崎沖ら 119 人が「熊本移住協同組合」を組織して、夕張郡由仁町に未墾地 260 万坪貸し下げをうけて入植。しかし、失敗。翌 1892 年、佐々友房・井上毅・高橋長秋らが請け負い、80 戸入植。これも失敗。合志林蔵・三島五雲が実地調査等を経て、1894（明治 27）年３月から 96 年７月までの間に 124 戸、340 人が入植。湿地帯の泥炭地で苦労に苦労を重ねて、1901（明治 34）年に漸く「熊本開墾」･「熊本部落」と呼ばれる集落ができた。

だが、熊本出身者は減少。1904（明治 37）年―23 戸、1913（大正 2）年―16 戸

1912（明治 45）年熊本神社を建立。本妙寺に願って、清正公の木造をいただき御神体にした。（猪飼『熊本の明治秘史』熊本日日新聞社　1999 年）

4　ハワイに神社　　1898（明治 31）年、ヒロ大神宮―天照大神・八幡神・清正公の３柱

「此頃ヒロ市に於て、一個の神社を建立しヒロ神社と申す者の計画に奔走致居る者有之哉に聞及申候。守護神は天照皇大神、八幡神、清正公三柱神等を混同し、此等諸神の共同力に依つてヒロ日本人の利益を保護し、併せて其福魂を増長せしむるの目的」（『やまと新聞』明治 30.10.21　福西『前掲書』）

5　1928（昭和３）年の緑川改修事業（「内務省堰建設」）をめぐって

宇土史談会「飽託郡川尻は、その字の示す如く、近古までは緑川河口にして川尻の津と称せり。公（清正公）の時、大に新地を興すと同時に、緑川筋の改修を断行せるも、之等新地の灌漑用水に就ては至大の苦心の末、遂に逆流水を利用する奇想天外の設計をなし、新たに川尻より川口村に至りて海に朝する河身、宇曲して長蛇の如きものを掘鑿セラレタリ。…公の治水をなすや、力めて下流の自然に重きをおき、併せて之が利用方策を講じて万遺憾なからしめたるを以て、今日是が一木一石を動かすにも、十分なる研究の上ならでは、猥りに之を改変すべからず」（『九州新聞』昭 3.2.1 『新宇土市史』通史編第３巻　2009 年）

Ⅱ　軍神として

1　熊本県下の神社等に奉納された絵馬に見る傾向(辻春美さん―熊本市北区在住―の調査から)

県下に、4485 面の絵馬の存在が確認。その内 3212 面（71.6%）が、「和花三神・三十六歌仙等」で他を圧倒している。その残りの 28%余りのうち、天岩戸や天孫降臨・神功皇后といった神話を題材にしたものが 231 画、歴史に題材を求めたものでは、源平合戦や牛若丸と弁慶、常磐御前・巴御前がとくに多く 192 画、これにつぐのが加藤清正で 139 画を数える。

奉納の時期	賤ケ岳合戦の図	清正公図	清正朝鮮降伏図
ペリー来航以前	8	3	1
～ 1867（慶応 3）年	7	4	1
～ 1872（明治 5）年	5	2	1
～ 1889（明治 22）年	20	5	
～ 1912（明治 45）年	14	5	1
大正年間	1	0	
昭和前期（敗戦まで）	0	3	
戦後	0	1	
不明	31	18	8
計	86	41	12

（清正公図は、武将姿の、虎退治・悪党退治・奮戦図。

清正朝鮮降伏図は、城攻図、朝鮮から富士をみる図などを含む。敗戦後、進駐軍の来県を前に、床下などに絵馬を隠したことなどから損傷が激しく、奉納の時期が不明になったとのこと）

2　いつ軍神になったか？

1925（大正 14）年　熊本三大事業記念国産共進会に際してつくられた清正公像

＝着物姿で治水土木を指揮する姿（甲斐青萍原画、松原象雲作）

（三大事業は、市電の開通、上水道施設の竣工、歩兵第２３連隊の移転）

1935（昭和 10）年　清正没後 325 年遠忌に際してつくられた清正公像

＝長烏帽子形兜に鎧姿、片鎌槍（北村西望作）

「生きては武将の典型なり、死しては軍神に祭祀せらるゝもの」(『九州日日新聞』昭和 10.4.7)

新訂尋常小学唱歌（第 5 学年、1932 年)「加藤清正」

1　勝ち誇りたる敵兵を　一挙に破る　七本槍の随一と　誉は高き虎之助　蛇の目の紋の陣羽織　十字の槍の武者振は　後の世までの語りぐさ

2　友危しと身をすてて　赴き救ふ蔚山や　百万余騎の明軍の　荒肝ひしぐ鬼上官　黒地に白き七文字の　妙法蓮華の旗風に　異国までも靡きけり（福西『前掲書』参照）

Ⅲ　ハンセン病救済の神として

ハンナ・リデル「本妙寺に這入る所の道路は又両側に桜が…。私は生涯忘れることの出来ない所の悲惨の状況を眼に致した…殆んど地面も埋れるばかりに集まつて居りますのは人々から憐みを乞ふという望みで…この憐れなる所の患者は何を頼つて居るか…唯だ加藤清正の霊に頼り縋つて居る…加藤清正に頼りましたならば、自分の癩病が癒されるだろうといふ幽かな望みを頼りに一生懸命にお祈りを…」(大阪での第 72 回救済事業研究会での講演「回春病院設立の動機に就て」1919 年　猪飼『ハンナ・リデルと回春病院』熊本出版文化会館 2005)

同「九州の至るところから、またお隣の四国からも、彼等は集まって来ています。そこでは、病気の進行具合の違う人々がそれぞれ列をなして跪き、熊本の先の領主であった男の霊に、嗚呼！そんなにも真剣にお祈りをしているのです。彼は 300 年ほど前に死んだ人で、近くの構内に埋葬されていますが、彼等はその男が神になっていると考えているのです」(「日本のハンセン病患者」1894 年　同上)

清正公信仰と干拓

熊本地名研究会　佐藤 伸二

清正公信仰が形となったのが加藤神社である。県内でも各地に建立されている。これらの創建時期や所在地の地形や地名などを整理すると、県内の清正公信仰の姿が見えてくると思う。現段階では一部の地域しか歩いていないので、八代平野の加藤神社を紹介しながら、干拓と清正公信仰のかかわりについて考えたい。

①貝洲の加藤神社――この地域の新田開発事業に当たった鹿子木量平が文政５年（1822）に本妙寺浄池廟より分霊を勧請して祠堂を建てた。明治３年（1870)、神社に改めた。

②新牟田の加藤神社――創建年代不詳。新牟田新地は加藤清正により慶長 13 年（1608）に築造されたという。

③宮原の加藤神社――創建年代不詳。境内に虎塚と呼ばれる石塔がある。

④八代新地の加藤神社――慶応２年（1866）に創建された。八代新地の干拓は文政２年（1819)。

⑤網道の加藤清正――創建は嘉永６年（1853)。網道は嘉永５年（1852）に完工した干拓新地内の集落である。

⑥亀松の加藤神社――創建は弘化４年（1847)。文政７年（1824）に完成した亀松新地内の塩浜集落の守り神。

⑦高良八幡宮境内の加藤神社――総持院境内にあったものを明治 12 年（1879）に移された。極楽寺円海山総持院は天台宗で延暦寺の末派であった。

以上のように、八代平野の加藤神社は干拓地に多い。これとは対照的に熊本平野の干拓地には加藤神社がない。これは何を意味しているのだろうか。会場で共に考えたい。

八代平野の加藤神社位置図

加藤清正関連年表

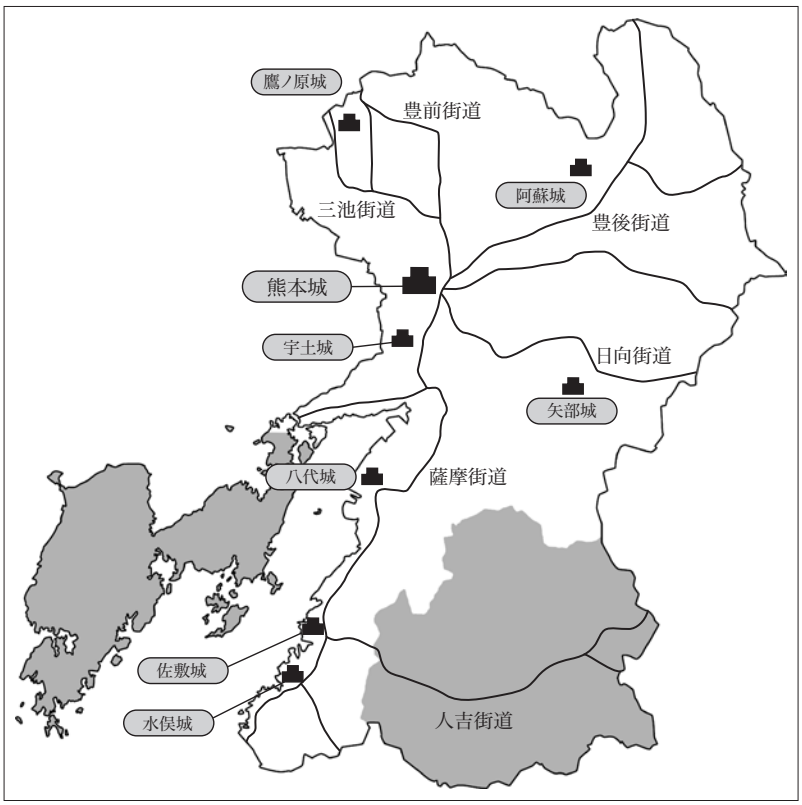
年号	西暦	出来事	
永禄 5 年	1562	・尾張国愛知郡中村にて加藤清忠の長男として生まれる。幼名夜叉若。	
天正 2 年	1574	・この頃、遠縁である長浜城主木下藤吉郎に仕えたといわれる。	
天正 4 年	1576	・元服、加藤虎之助清正と名乗る。知行 170 石。	
天正 11 年	1583	・賤ヶ岳の合戦に参加。賤ヶ岳七本槍に数えられる。3000 石に加増。	
天正 13 年	1585	・従五位下主計頭に叙任する。	
天正 16 年	1588	・5 月 15 日、秀吉、肥後を二分し、清正及び小西行長に与え、清正を隈本に、行長を宇土に置く。清正に領知高 8 郡 194,916 石を宛行う。 ・6 月 27 日、隈本に入城する。（清正記）	肥後入国
天正 17 年	1589	・10 月 29 日、行長の救援のため兵 1 万余人を率い、この日に川尻を出発し、志岐を討つ。（新撰事蹟通考） ・11 月 5 日、天草伊豆守の家臣木山弾正を討つ。ついで志岐麟専を降す。（新撰事蹟通考）	
天正 19 年	1591	・10 月 10 日、名護屋城の普請を監督する。（加藤清正手簡）	
文禄元年	1592	・3 月 4 日、名護屋より壱岐に渡る。相良も行動を共にする。 ・4 月 20 日、慶州城を陥す。 ・5 月 3 日、清正・行長ら京城に入る。 ・6 月 3 日、秀吉、朝鮮渡海陣立書を諸大名に宛つ。清正は先手 1 万人。 ・6 月 15 日、薩摩島津義久の臣梅北国兼、佐敷城を襲う。（小早川家文書） ・6 月 17 日、佐敷城番衆坂井善左衛門ら梅北勢を佐敷城にて討ち取る。（毛利家文書）	朝鮮出兵
慶長元年	1596	・7 月 13 日、伏見大地震あり。閉門中の清正、伏見城に馳せ登り秀吉に謁する。（清正記） ・10 月 5 日、再征を命ぜられ大坂より帰国する。（相良家文書）	
慶長 2 年	1597	・1 月 13 日、慶尚道多太浦に到着。ついで西生浦に移る。 ・12 月 22 日、明軍、蔚山城を攻撃する。清正、西生浦から救援のため蔚山城に入る。 ・12 月 23 日、普請した蔚山城を請取り、明軍に対する。 ・12 月 24 日、明将軍の総攻撃を撃退する。 ・12 月 27 日、明軍大挙して蔚山城を攻撃し、包囲する。清正ら苦戦する。	
慶長 3 年	1598	・1 月 4 日、明軍、蔚山城の囲をとき退く。清正ら追撃して破る。 ・8 月 18 日、豊臣秀吉逝去。 ・11 月 23 日、釜山を発し、帰国に向かう。 ・11 月 27 日、壱岐勝本に到着する。 ・12 月 2 日、博多にいたり神屋宗湛に書状する。	
慶長 4 年	1599	・3 月 4 日、石田三成を誅することを計画する。（浅野家文書） ・4 月、家康の養女（水野忠重の娘）と婚姻。	

年号	西暦	出来事	
慶長５年	1600	･9 月 15 日､関ヶ原の合戦。松井康之､大友吉統に攻められ清正に救援を求める。清正出兵する。（松井家記） ･ 9 月 17 日、松井康之の勝利を聞き、途中より引き返し、宇土に向かう。 ･ 9 月 18 日、豊後より兵を帰す。先鋒宇土城攻撃を開始する。 ･ 10 月 15 日、大坂本妙寺を菩提所として熊本に移す。（肥後国誌） ･ 10 月 20 日、黒田如水らと柳川城の立花宗茂を開城させる。 ･ 10 月 23 日、小西長元（隼人）、部下将兵の助命を請い開城する。 ･ 10 月 28 日、筑後三沼郡に三ヶ条の禁制を下す。 ･ 12 月、肥後全領（球磨・天草を除いた）を宛行われる。（新撰事蹟通考）	肥
慶長６年	1601	･ 2 月、豊後三郡（海部・大分・直入 2 万石）を宛行われる。 ･ 8 月 7 日、隈本新城築城を開始したとされる。	
慶長７年	1602	･領内のキリスト教を厳禁し、八代にて殉教行われる。（日本切支丹宗門史）	後
慶長８年	1603	･ 3 月 25 日、従四位下肥後守に任ぜられる。	
慶長 10 年	1605	･ 4 月 16 日、秀忠将軍職に就任する。清正も侍従に任ぜられる。	入
慶長 12 年	1607	･隈本城完成、隈本を熊本に改める。 ･ 10 月 18 日、甲佐を巡検し、緑川の改修を計画する。（加藤清正伝） ･ 12 月 10 日、緑川改修に着工する。（清正記）	国
慶長 13 年	1608	･ 3 月 16 日、緑川改修が竣工する。（清正記）	
慶長 15 年	1610	･ 2 月 8 日、名古屋城築城の普請役を命ぜられ、熊本出発する。（徳川実記） ･ 3 月 3 日、普請惣大将役を命ぜられる。 ･ 4 月 15 日、この頃熊本城大広間及び花畠を造営する。	
慶長 16 年	1611	･ 3 月 28 日、二条城で徳川家康と豊臣秀頼会見。清正、秀頼を警固する。 ･ 5 月 26 日、熊本へ帰国途中の船内で発病。 ･ 6 月 24 日、熊本城内にて逝去。	
		･ 8 月 4 日、家康、虎藤（忠広）に遺領相続を許可する。 ･ 8 月 28 日、虎藤（忠広）、熊本に着し、家老役に並河金右衛門（志摩）・下川又左衛門・加藤与左衛門・加藤清左衛門・加藤美作の五人を任ずる。（新撰事蹟通考）	加
慶長 17 年	1612	･ 6 月 14 日、忠広、肥後 12 郡 519,600 余石、豊後国内 2 万石、計 54 万石宛行われる。	藤
元和４年	1618	･5 月 11 日､忠広家臣内部の紛争激化する。馬方（加藤右馬允）､牛方（加藤美作）に二分する。 ･8 月 11 日､将軍の裁決で､美作派の横江清四郎らを斬罪に､美作を越後村上に､その子丹後を信州川中島に、中川周防を信州諏訪に、玉目丹波を会津に配流する。忠広は幼少につき特赦される。国政は加藤右馬允らに執政させる。（徳川実記）	忠 広
寛永９年	1632	･ 6 月 1 日、忠広、改易処分となる。忠広は出羽庄内に、光正は飛騨高山に流される。（徳川実記） ･ 10 月 4 日、細川忠利、肥後転封を命ぜられる。肥後 12 郡 519,000 余石、豊後 3 郡 2 万余石。（本藩年表） ･ 12 月 9 日、忠利、熊本城に入る。（本藩年表）	

加藤清正の端城（支城）

天正 15 年（1587）の豊臣秀吉の九州仕置後、天草郡・球磨郡を除く肥後国は、佐々成政が領有することになる。しかし、成政は翌年起きた「国衆一揆」の責任を問われ切腹を命じられる。天正 16 年（1588)、佐々成政の旧領地は加藤清正・小西行長が分割統治することになる。加藤清正は熊本城を本城として、南関・阿蘇・佐敷・水俣を端城とした。また、小西行長は宇土城を本城とし、矢部・八代を端城とした。

関ヶ原の戦い後、加藤清正は戦功により旧小西領を加えて、天草・球磨郡を除く肥後国を統治することになる。



加藤清正の端城位置図

慶長の「肥後国絵図」によると、当時の加藤領には、関ノ城（鷹ノ原城）・阿蘇城・矢部城・宇土城・八代城・佐敷城・水俣城の七城が確認できる。肥後と筑後の国境に関ノ城、豊後国に備えて阿蘇城、日向国に備えて矢部城、宇土半島の丘陵部に宇土城、相良領との隣接地に八代城・佐敷城、薩摩との国境に水俣城が配置されている。

上記の加藤清正の端城には、次に挙げる性格が顕著に見られる。

①堅固な地に築かれている事（軍事）

②交通の要衝に築かれている事（経済）

③在地支配の拠点を有する（行政）

このように、加藤清正の端城は軍事面における要所、もしくは政治・経済面において重要な地に築かれている。そして、端城が置かれている地は、元和の一国一城令後、八代城を除き、城が破却されても、江戸時代を通じ在町として地域の経済・文化の中心で、街道筋の宿場町などとして発展を続けた。

メモ

九州文化財研究所のあゆみ

九州文化財研究所の歴史は、地域の文化財を守り、文化財に対し熱意をもって未来へ伝えていくという使命感とともに始まりました。

1993 年（平成 5 年）の創設以来、地元熊本県を始め、九州・沖縄の各県だけでなく中国・四国・関東の地域の業務も行っております。今後も文化財に係るさまざまな分野に、誠心誠意を持って職員一同取り組む所存です。

年	出来事
1993（平成 5）	有限会社　文化財環境整備研究所設立
1995（平成 7）	測量業者の登録（登録番号第 1-23532 号）
1997（平成 9）	株式会社　文化財環境整備研究所に組織変更設立
2002（平成 14）	株式会社　九州文化財研究所に社名変更 本社移転（熊本市神水 1 丁目 32 番 19 号）
2003（平成 15）	鹿児島営業所開設
2006（平成 18）	長崎営業所開設
2008（平成 20）	創設 15 周年　講演会・シンポジウムの開催 （「加藤清政の端城と文化遺産の活用 –熊本城築城 400 年によせて–」）
2009（平成 21）	八代営業所開設 城南町歴史民俗資料館にて新史料による資料展示会開催 （新史料による「天草･島原の乱」–そのとき徳川幕府軍はどう考えたか–）
2010（平成 22）	青少年の未来に自然科学の灯をともす講演会・シンポジウム開催 （ノーベル賞受賞者益川敏英博士と語りあう「自然をより深く学ぼう」）
2011（平成 23）	保存処理事業開始 白黒写真フィルム現像業務開始
2012（平成 24）	本社拡張
2013（平成 25）	創設 20 周年　講演会・シンポジウムの開催

～メセナ～

○加藤清正の端城と文化遺産の活用
―熊本城築城 400 年によせて―

文化遺産の保存整備等に携わって 15 周年を迎えた九州文化財研究所は、城跡・地域遺産を活用した地域おこしの支援事業を開催しました。

各地域には、シンボル的役割を持ちながら、生活にとけこんでいる歴史遺産が数多くあります。その歴史遺産を再認識し、地域のために活用していくために、様々な立場から、その地域における活動事例などを紹介していただくシンポジウムを計画しました。

シンポジウムの中心のテーマは「熊本城築城 400 年によせて 加藤清正の端城と文化遺産の活用」としました。領内に 7 か所あった加藤清正の支城（端城）は、人々の思いを引きつけ、伝統行事などの文化遺産を活用する中核の一つになるからです。

講演会とシンポジウム
くまもと県民交流館パレアにて　2008 年 8 月開催

講師・パネラー：
服部 英雄 氏（九州大学大学院教授）
パネラー：
坂本 重義 氏（南関町教育委員会）
野口 第三郎 氏（南関宿場町伝来人）
藤本 貴仁 氏（宇土市教育委員会）
田尻 昭三 氏（宇土大太鼓フェスティバル実行委員）
深川 裕二 氏（水俣葦北地名研究会）
吉本 憲夫 氏（街道を歩こう会 歩き人）
正岡 祐子 氏（水俣市教育委員会）
福田 興次 氏（福田農場ワイナリー代表取締役）
コーディネーター：
佐藤 伸二 氏（元国立八代工業高等専門学校教授）

○新史料による天草・島原の乱
―その時、徳川幕府軍はどう考えたか―

今からおよそ 370 年前に天草・島原の乱は終結しました。この一揆に関して、いままで豊富に残る史料により多くのことが語られています。しかし、幕府軍が、いつどの段階で指示を出していたかは明確ではありませんでした。「天草四郎をいけどりに」と指示した、幕府軍総司令官松平信綱の書状をはじめとする、今まで不明瞭であった幕府軍の動きを、未公開一次史料で明らかにすることを試みました。

また、細川軍の中にあって、藩主忠利の側に付き添っていたひとりの軍師がいました。その名は、雲林院弥四郎（うじい やしろう）。当代随一といわれ、柳生宗矩や細川忠興を絶賛させた武芸者を、初公開しました。

企画展示会
城南町歴史民俗資料館にて　2009 年 2 月～ 3 月開催

開会挨拶：
吉村 豊雄 氏（熊本大学教授）
講師：
花岡 興史　（学芸員
九州文化財研究所　調査部部長）

○ノーベル賞受賞者　益川敏英博士と語りあう
「自然をより深く学ぼう」　菊池川自然塾企画

青少年の未来に自然科学の灯をともす講演会を開催しました。

九文研が事務局として活動している菊池川自然塾の趣旨に益川博士が賛同し、ノーベル賞受賞よりおよそ 1 年で、来熊が実現しました。高校生による司会のもと、益川博士の基調講演のほか、共催の熊本大学学長や熊本県知事、大阪大学名誉教授の講演やパネルディスカッション、来場した青少年と活発な質疑応答も行われました。

講演会とシンポジウム
ホテル熊本テルサにて　2010 年 3 月開催

講師・パネラー：
益川 敏英 氏（ノーベル物理学賞受賞者
物理学者　京都大学名誉教授）
蒲島 郁夫 氏（政治学者　熊本県知事）
パネラー：
谷口　功 氏（応用化学者　熊本大学長）
猪飼 隆明 氏（歴史学者　大阪大学名誉教授）
コーディネーター：
冨田 克敏 氏（地質学者　菊池川自然塾主宰
九州文化財研究所顧問）

Ⅹ 九州文化財研究所の事業内容

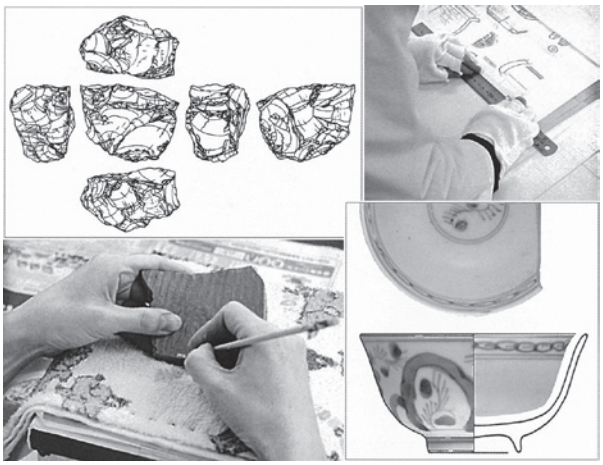
九州文化財研究所は、考古学だけでなく地質学や歴史学などの専攻職員が、遺跡の形成過程から立地や歴史背景まで考えた調査に取り組みます。

埋蔵文化財発掘調査

過去の人々が残した生活の痕跡を発掘し、出土品の収集、現場形状の測量、写真記録等を行います。

出土遺物整理

出土した遺物を洗浄・復元・分類・記録等を行い、当時の使用方法を探ります。



報告書作成

発掘調査や遺物整理から得た情報を基に、写真や図面を活用し、当時の状況や人々の生活様式などを皆様にお伝えする書物を作ります。

史跡整備

都城跡、城跡、旧宅などを整備・復元し、誰もが身近に感じていただける環境を整えます。

（芦北町佐敷城跡航空写真）

保存処理　＜新技術＞

処理時間が比較的短く、処理後の保管が容易な新技術による保存処理法を推進しています。

主に金属製品・木製品・石造物の保存修復を行っています。

従来の方法とは異なり､遺物そのものに含まれる「水」を利用します。遺物に負荷をかけず、処理後も遺物その物の質感を保持します。

また、処理後のメンテナンスも責任もって行います。

処理前　　処理後

（熊本市二本木遺跡出土遺物）

理化学分析

博士号を取得し、国際学会等の経験豊富な調査員がさまざまな分析を行います。

例えば、出土遺物に対して肉眼的観察を基本とした石材分析を行い､鉱物学的見地から石材を特定します。

また、土層の堆積状況を観察し、地形と遺跡形成過程の一端の解明等も行います。

白黒現像

近年減少している白黒フィルム現像を行い、白黒写真による記録保存を行います。

フィルムのスキャニングを行うことで、データをパソコンで確認できます。どこよりも迅速な現像、納品が可能です。

史料解読・調査

大学等で講義経験豊富な専門の調査員により史料の解読を行います。記載内容の解明だけでなく、歴史的背景から文章の記載内容を検証します。

民俗資料調査

伝統的工芸品などの民俗資料について、歴史的背景や作成手法などを、フィールドワークや文献などから調査し、指定文化財へ向けた審議会議などで概要の説明を行います。

九州文化財研究所の本

これらの書籍は全国の書店で購入できます。

○『加藤清正の端城と文化遺産の活用　―熊本城築城 400 年によせて―』

九州文化財研究所創設 15 周年を記念して行われたシンポジウムの内容を著している。端城を中心とした内容で、九州大学大学院の服部英雄教授（元文化庁調査官）の講演をはじめとして、各地域の文化財担当者の文化財活用論は必見。七つの端城を中心とした地域文化財の紹介も好評。

A4 判　500 円（税込）

○『―はじめて実測を試みるあなたへ―　石器の実測をしよう！』

実測初心者にとって大きなハードルとなる難解な表現を、イラストをふんだんに取り入れてわかりやすく解説した視覚にうったえる教科書。初心者や実測をあきらめかけている人たちのための画期的な入門書である。

B5 判 58 ページ　1,500 円（税込）

○『新史料による天草・島原の乱　―その時、徳川幕府軍はどう考えたか―』

「天草四郎をいけどりに」と指示した、幕府軍総司令官松平信綱の書状など、未公開一次史料を多数掲載。また、柳生宗矩・細川忠興をして「当代随一」と言わしめた実力を持っていた雲林院弥四郎 (うじい　やしろう) を、柳生宗矩の書状、塚原卜伝の伝授書をはじめとする一次史料で紹介する。今まで数百年間未公開であった史料により、伝説の兵法家たちの存在が明らかとなる。未公開資料 43 点。

A4 判 150 ページ　2,000 円（税込）

○『新訂　九州縄文土器の研究』 小林久雄　著　雄山閣 出版

九州縄文土器の編年を確立した、小林久雄先生の偉業の集大成で、多くの研究者から再刊が望まれていました。『九州縄文土器の研究』から研究論文を中心に、九文研が事務局として再編集しました。

A5 判 351 ページ　7,890 円（税込）

近日刊行予定

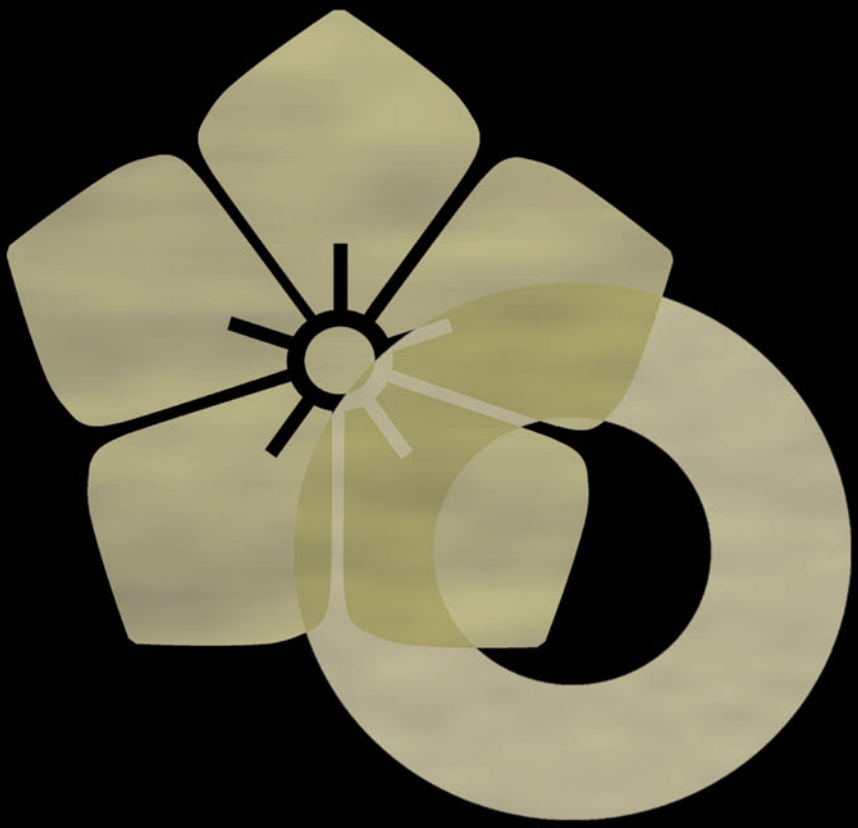
石器実測に続く、第２弾！

『―はじめて実測を試みるあなたへ―
　土器の実測をしよう！』

三次元の遺物の特徴を理解し、二次元に描き表すという作業を伴う土器の実測には多くのつまずきが付き物である。石器実測本と同様に、多くのイラストを取り入れてわかりやすく解説しており、視覚にうったえながら実測初心者の疑問を解決に導く入門書である。

九州文化財研究所 創設20周年記念
～生誕450周年記念によせて～
「加藤清正の実像と英雄像の受容」

発　行　日：2013年4月27日
編集・発行：九州文化財研究所
〒862-0954　熊本市中央区神水1丁目32番19号
TEL 096-381-2267　FAX 096-381-2299
E-mail：bunkazai@iwk.bbiq.jp
URL：http://kyubun.sakura.ne.jp/
印　　刷：株式会社　城野印刷所



九州文化財研究所
〒862-0954　熊本市中央区神水 1 丁目 32 番 19 号
TEL 096-381-2267　FAX 096-381-2299
http://kyubun.sakura.ne.jp